

第51回 (通算第134回) : 2011年6月23日 (木)
(座長:廣瀬浩二)

附属歯科診療所歯科技工室のレベルアップの取り組み ～教職員・専攻生の立場から～

飛田 滋 (歯科技工士学科)
大沼誉英 (歯科技工士学科)

本歯科技工室は大学附属歯科診療所の重要な施設の一部であり、生体技工専攻生の臨床教育の基地でもある。この二面性を持つ歯科技工室は、附属歯科診療所の治療と収入の向上に追随するために、歯科技工のレベルアップが常に求められる。平成21年10月から歯科技工室長と専攻科の歯科技工指導責任者を兼務してきたが、レベルアップのための取り組みを三つ実施した。第一は外注の節約である。つまり最終歯科技工装置の内製化が外注料金の節約に繋がるのである。第二は専攻生の症例数を飛躍的に増やし、臨床技工能力の向上に努めた。第三は教職員(3名)の症例技工への積極的な参加である。特にCAD/CAMによるジルコニア修復とインプラント歯科技工を積極的に対応した。他に複雑な有床義歯の製作(義歯修理を含む)も対応した。本歯科技工室のレベルアップは、まず教職員が率先して行うことによって本学の歯科技工技術の基盤が確立し、その結果専攻生と本科生への教育的効果が発揮されるものと考えられる。

東日本大震災歯科医療支援活動に参加して

渡邊美幸 (歯科衛生士学科)

甚大な被害をもたらした東日本大震災から2ヶ月が経った5月下旬、大学側のご理解と先生方のご協力を得て、歯科医療支援活動に参加させていただいた。活動期間は平成23年5月23日(月)～28日(土)、活動地域は岩手県山田町で、計9カ所の避難所を巡回し、主に歯科診療車でのアシスト業務を行った。この期間内の受診者数は131人で、1日平均受診者数は22人であった。治療内容は義歯関係が最も多く、48%であった。歯科診療車で診療を初めて体験し、限られた歯科器材・薬剤での治療や感染患者への対応の難しさなどを痛感した。また、被災者のニーズの把握やマンパワーの確保は必須であり、現地のコーディネーターの存在は重要と思われる。今後は心のケアに重点をおいた長期的な支援が必要と考え

られる。今回の活動を通し、多くの人との出会いがあり、チーム医療のすばらしさを実感することができた。この貴重な経験を学生に伝え、災害緊急時に行動できる歯科技工士・歯科衛生士の養成に取り組んでいきたい。

第52回 (通算第135回) : 2011年7月28日 (木)
(座長 : 平澤明美)

学習のつまずきと歯科技工教育

丸山満 (歯科技工士学科)

歯科技工実習の実習指導は重要である。実習内容の理解に至るまで複数回、もしくは個別指導が必要な学生もいる。内容を十分に理解できないまま実習を開始する学生は、学習のつまずきに発展する可能性も否めない。

そこで、以前より報告されている義務教育から高等学校までの16の学習のつまずきをもとに、歯科技工実習の実習指導との比較、検討を試みた。すると、Ⅰ：習熟練習を増やすことでクリアできる→反復実習、Ⅱ：再度、概念規定の部分からやり直す→実習説明・復習(ミニテスト等)、Ⅲ：言葉の学習をきちんとする→講義・実習説明となった。さらに、自己の進行状況を自覚するためにⅣ：目標設定→行動スケジュールの明確化も追加が必要と思われた。

学生が十分に理解できる実習指導は、反復実習、復習(ミニテスト等)、講義、行動スケジュールの明確化が肝要といえる。今後は、個別指導による放牧型、徘徊型実習とならないような指導について検討していきたいと考える。

西新潟中央病院における歯科口腔介護の 取り組み—15年間の活動報告—

江川広子 (歯科衛生士学科)

本学歯科衛生士学科では、平成9年度より「歯科口腔介護教育」をカリキュラムに導入した。歯科口腔介護を臨地・臨床実習ローテーションに組み入れるためには、実習施設の確保が必要であった。そこで、臨地実習事前指導の場として「西新潟中央病院」に歯科医師、歯科衛生士、学生によって編成された歯科口腔介護チームによる、歯科口腔介護の手法の指導が開始された。平成9年から平成22年の期間、参加者チームは歯科医師10名、歯科衛生士31名、学